2019年
3月号
NO.0079

カトリック笹丘教会
教会ニュース

福岡市中央区笹丘1-16-1
TEL761-4504　fax761-4524
広報委員会

福岡教区 2019 年の目標　「信じる喜びから伝える喜びへ」

四旬節の断食

主任司祭　遠山満

先日、3月6日（水）の灰の水曜日から、私達は、四旬節に入りました。四旬節は、イエス様の御受難を黙想しながら、普段よりも、祈りや施し、そして断食に務める期間です。祈りや施しに関しては、他の時期にも話題になりますが、断食は、この時期、特有のものではないかと思います。それでは断食は、私達の霊的生活にどのように影響を及ぼし得るのでしょうか。

断食によって私達は、身体的な欲求を霊魂の欲求に従わせる事ができるようになります。私達の普段の生活は、私達が身体的な欲求をコントロールしていると言うよりも、私達がそれにコントロールされていると言っても良いような状態です。そのような状態にある私達が、断食によって、生きる為に本当に必要な欲求（例えば食欲）をコントロールする事、また、生きる為には本来必要のない欲求、大酒とか、その他、私達に嗜癖行動を起こさせる欲求をコントロールする事を学びます。聖書の中では、食物を慎むことだけでなく、汚い言葉を語る事や他者を裁く事、噂話、否定的な言葉を慎む事に関しても言及されています。

断食は、私達に悪習慣を起こさせ、私達を悪へと誘う元凶、霊的肥満の減量へと繋がります。それによって私達は、四旬節全体を通して、教会の典礼の中で告げられる神の言葉を、豊かな感性で受け止める事ができるようになります。また断食は、私達の、道徳的、霊的な強さを増し加えてくれます。更に断食によって、私達は、私達に本当に必要な分がどれ位か理解できるようになり、それによって、施しもできるようになります。教皇レオ13世は、言っています。「一度、私達にとって必要なものが如何ばかりか分かったならば、残りの富は貧しい人に属する」と。また、聖ヨハネ・クリゾストモは次のように言っています。「箪笥の中に、二枚のシャツがあるなら、一枚はその人のもの。もう一枚は、シャツを持っていない人のものです」。私達は私達に与えられている神様からの恵みを、寛大に分かち合うようにしましょう。全てを、御自分の血の最後の一滴までも、私達にお与え下さったイエス様が、御自分に従うようにと言われます。私達は、私達が有する時間、タレント、富を、持っていない人達と寛大に分かち合いながら、この四旬節を過ごして参りましょう。

カトリック笹丘教会　拡大信者会　議事録

日時　：　２０１９年３月３日（日）　１１：４５～１２：３０　約３０名参加
信徒会館ホールにて

✝主の祈り

<u>議　題</u>

1. アンケート結果について・・・29 名の回答あり

①新年度役員選出について・・・役員に推薦されたのは、男性:21名、女性25名。
（「やってもらいたい方の名前がわかりません。よい方が推薦されますように。」とのコメントも・・・。）

・推薦された人は、3月17日(日)10 時ミサ後、集まってもらう。
3 日の拡大信者会に出席していない人には、案内のハガキを出す。
現在の役員は、会長1名、副会長男女各1名、書記2名、会計2名

②2019年度目標の取り組みについて・・・提案内容は別紙参照

・バザー、黙想会、勉強会、コミュニティカフェなど、多岐にわたる提案がなされている。
・すぐ実行できそうなものは、それぞれ個別にでも実現させ、話し合いが必要な小教区で取り組むべきことは、拡大信者会で話し合ってはどうか。
いろいろな提案が出ているのを見て、元気が出る思いがした。
・実際にやることはある程度絞りこんで、あまり忙しくならないようにする。
・年間テーマは、1 年間で消化するのはむずかしい。
・今年 11 月に教皇様が来日されることが決まり、福岡教区では教皇様の使徒的勧告「喜びに喜べ」について、生活聖化委員会の担当司祭が、教区報に記事を書くことになっている。今月号に第1回目の記事が載っている。こういう記事を読んでいくのも、教皇様をお迎えする準備になるのでは？
今年は、国内全教区で教皇様をお迎えする準備に取り組むことになる。(主任司祭より)
→実際に取り組むことは、3月23日(土)の役員会で話し合い、4月の拡大信者会で意見を出してもらい、信者会総会(5/12)に諮る。
4月の拡大信者会までに、具体的に取り組んでいきたいことを考えておいて下さい。

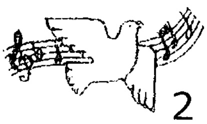
2. 四旬節について

・3月6日(水) 灰の水曜日。 8日(金)から毎金曜日15:00「十字架の道行」
・4月14日(日) 受難の主日(枝の主日)　黙想会・・・指導司祭:澤田豊成神父様(聖パウロ修道会)
・4月21日(日) 復活の主日

3. その他

・現在求道者はいるが、今年のご復活は洗礼式はないかもしれない。ご親戚・知り合いの方を教会に誘ってほしい。(主任司祭より)

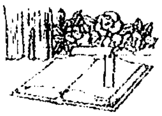
✝アヴェ・マリアの祈り



２０１９年度目標「信じる喜びから伝える喜びへ」

具体的な取り組みについて

≪信者会で実施したアンケートで提案された項目≫



・聖歌について学ぶ機会がほしい。

・黙想会→勉強会→親睦会の実施。

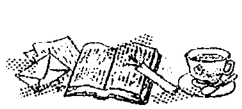
・「伝える喜び」をテーマにした体験談を募集し「教会ニュース」に掲載する。

・希望者による座談会を開催し、「教会ニュース」に掲載し冊子（あまり厚くならない程度）を作成する。勉強会形式はやめてほしい。

・「宣教」だけが「伝える」とは限らないと思います。信者の佇まい、ごミサ前にはなるべく早く教会に着き、各々祈りの時を持つ。その姿が多くの人びとに伝わればいい。

・小グループで自分のしていること、他の方々がやっていることを分かち合う。

・使徒的勧告『喜びに喜べ』抜粋（要約）のプリント配布、『喜びに喜べ』をテーマにした黙想会の実施。・地域に開かれたコミュニティカフェの定期的開催の実施。



・使徒的勧告『喜びに喜べ』の読書会の実施。

・「ファミリア合唱団」を中心として外部機関（病院、商業施設、福祉施設等）でのクリスマスキャロル。

・一人ひとり神様の子どもである喜びを感じる機会を持つ。

・子どもから高齢者まで参加できる企画。

裏面につづく

アンケートで提案された項目のつづき

・何よりも人とのつながりが大切。

・み言葉を受けとめる子ども、友人に伝え日常生活を大切に生きる。

・「伝える喜びへ」聖書を一行でもいいので朗読する。

・『喜びに喜べ』のテーマの黙想会の実施。

・ミサ前後になるだけ笑顔を心掛ける。

・身近の困っている人、寂しい思いをしている人に声かけを試みる。また信者であれば訪問する。

・班単位で行動する。

・クリスマスバザーを大々的に実施する。ステージも充実させる。近隣、幼稚園に呼びかけをしてカトリックの紙芝居、DVD上映。

・クリスマスイブのミサに未信者を誘う。教会行事で感動を与える。六時のミサは子ども連れ中心、八時半のミサは大人中心。美しい声のアヴェマリアの独唱、朗読、楽器演奏、ミサ後のゴスペル。

・「信じることの大切さ」の黙想会、研修会の実施。

・スープの会への笹丘教会からの参加。

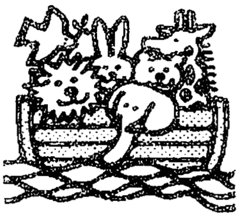
・地域住民、幼稚園父兄を意識してバザーを再開する。

① 参加者に教会案内を配布する。②バザー時間帯に神父様方に

『喜びに喜べ』を読み解く講演をしていただく。

・地域住民も対象の定期的なキリスト教関連映画の映写会を開く。

教会案内の配置。



∽∽∽∽ 信仰のルーツコーナー ∽∽∽∽∽

私の先祖　私を創ってくれた人のルーツを語る

―――― その７ ――――

匿名希望

ゼノさんことゼノ・ゼブロフスキー修道士は、１８９１年５人兄妹の四男としてポーランドの田舎町に生まれた。軍隊生活などを経験した後、１９２５年３４歳のとき、コンベンツァル聖フランシスコ修道会に入会する。 そして1930年４月２４日、コルベ神父等とともに長崎に来た。ゼノさんはいわゆる「何でも屋さん」だった。修道会の本業の「聖母の騎士」冊子作りに始まり、洗濯・日曜大工・炊事・買い物何でもこなした。特に長崎の人達との触れ合いはおてのものだった。あらゆる場所に行って、にこにこ顔で誰彼かまわず声をかけた。「あなた、メイシン（名刺）持ってたらください」そしてもらった名刺の住所に、片っ端から「聖母の騎士」を送った。また買い物に行けば八百屋さんに、にこにこ顔で話しかける。「これ何ですか？　おお、こんな野菜私の国にはありません。どうやって食べますか？」遠いポーランドという国からやって来た変な「オランダさん」を、やがて長崎の人達は「ゼノ神父さん」と呼んで親しむようになった。ゼノさんは神父ではない。しかし私の父は言った。「あそこ（聖母の騎士）は神父様も修道士さんもみんなおんなじ服ば着とったけん、おいも子どもの頃はみんな神父様て思うとった」

１９３６年管区長の命令でコルベ神父はポーランドに帰国し、長崎に戻ることはなかった。父は、コルベ神父のことは覚えていないと言った。修道院がある本河内に行くことはほとんどなく、幼い父は街中でよく見かけるゼノさんの姿だけはしっかり覚えていた。だから随分後になり、コルベ神父がゼノさんと一緒に長崎に来たこと、アウシュビッツ収容所であのような形で亡くなったことを知っても、始めはピンとこなかったと言った。

さて、戦争の最中旧制海星中学に渡船で通っていた父だったが、数日に一度ほど、大波止の岸壁ににこにこ顔で立つゼノさんの姿を見て身を硬くした。父達は船を降りると、学帽で顔を隠しながら、足早に通り過ぎようとした。そんな父達の前にこんな嬉しいことはないと言わんばかりの顔で、ゼノさんが駆け寄ってくる。「ぼーやたち、ぼーやたち、マリア様の学校のこどもでしょう！」いくら学帽で顔を隠しても、その上にはマリア様の学校の印である海星の校章が燦然と輝いている。「これ、お友達にあげてください。マリア様喜びます！」そしてチラシを二つ折りにした「聖母の騎士」の束を、有無を言わさず渡した。

父達は、毎回ゼノさんの「ぼーやたち」攻撃から逃げる術を必死で考えていたが、必ず誰か一人がゼノさんに捉まりどっさりと「聖母の騎士」の束を持たされる。同じようにチラシを渡された他の人々は、すかさずその場でポイ捨てしていた。いくら人気者のゼノ神父さんからもらっても、軍人の目に留まったらどんな目に合わされるかわからない。しかしさすがに「マリア様の学校のぼーやたち」は、ポイ捨てなどできない。泣きそうな顔でチラシの束を抱えている仲間の手から、父達は「しょんなか（仕方ない）たい」と言いながらそれ

裏につづく

つづき

ぞれ一掴みずつチラシを取った。これを持ったまま学校に行けば、軍人からどんなひどい仕打ちを受けるかはわかっていた。でも「しょんなか」だ。連帯責任だ。深く溜息をつきながら、重い気持ちで学校に向かう坂を登った。学校では激昂した軍人から予想どおりの仕打ちを受けた。父を含めチラシを持っていた生徒達は木刀を握った軍人に「足を踏ん張れ！歯を食いしばれ！」と、文字通り散々打ち据えられた。

やがて戦局が押し迫り、学生達は工場で兵器造りに駆り出された。しかしここでも「アーメンの学校の生徒」は差別に遭う。特に男子校の生徒達は屋外のつらい肉体労働が割り当てられた。海星の生徒達は、工場で造られた兵器の部品を二人一組でリヤカーで造船所に運ぶ作業をさせられた。雨の日も暑い日も寒い日も、終日ひたすらリヤカーで工場と造船所を何回も往復した。しかし、父は「それほど辛くなかった」と言った。「学校で毎日軍人から殴られるより、ずっと楽だった」と。

そして、あの８月９日がきた。【次月につづく】

受洗（2月10日）おめでとうございます！

フランシスコ・サレジオ原田恭輔(きょうすけ)ちゃん

↑
フランシスコ・サレジオ
原田恭輔ちゃん

洗礼式

編集後記

世は「終活」流行り。隣に住む母から回ってくる本も近頃、人生100年、人間と病気、家の始末、相続云々などの本が多くなってきた。その中の一冊、曽野綾子さんの本で心に残っている箇所ーー「人間の生涯はそのような何気ない日々の連続である。だから、特に勇敢なことも、名をあげるようなことも、何もしなくてよいのである。ただ、その人として限度いっぱいに生きたことを示せば、それでその人は充実した一日を暮らしたことになる。そして、満ち足りた一生というものは、そうした充実した人生の日々の積み重ねのことを言うのであろう。」
ーーそれが一番難しいのだけれど…。(F.K)